

平鹿郡平鹿町中山窯跡発掘調査概報

庄内 昭男*

I はじめに

当館が昭和55年から昭和57年にかけて横手・平鹿地域を対象として地域研究調査を実施してきた中で、考古部門としては「横手・平鹿地域の窯跡遺跡」を一つのテーマとして調査を進めてきた。

ここに紹介する中山窯跡は、すでに横手・秋田横断自動車道計画路線内No.10遺跡¹⁾として周知されていた遺跡であるが、県内では古い時期の須恵器が採集されており、注目されていたものである。

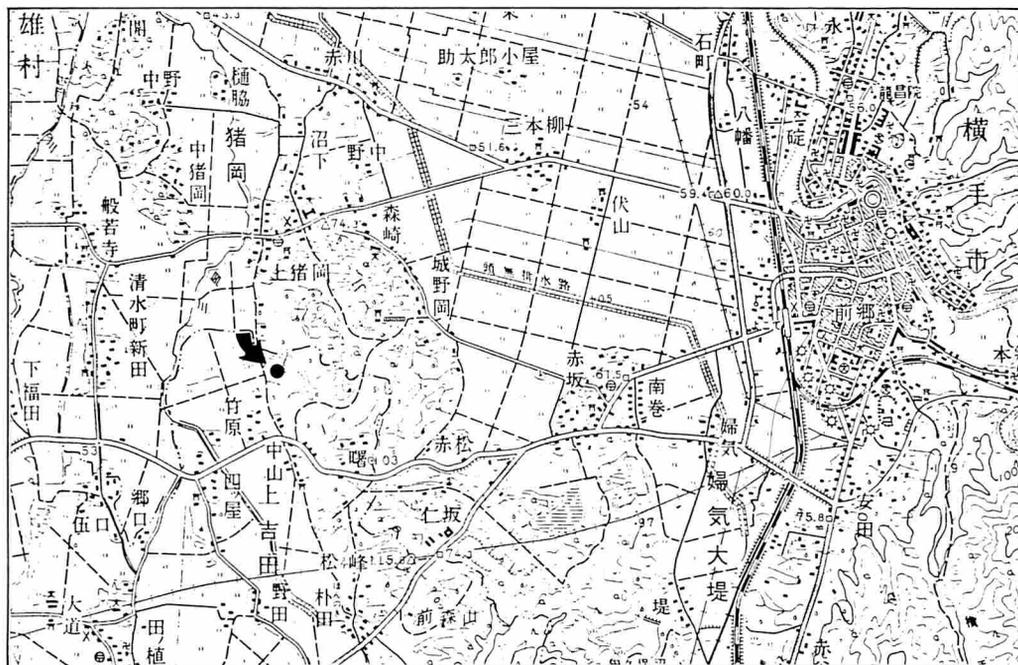
考古部門では昭和57年10月に範囲確認調査および試掘調査を実施した。その調査結果については、『秋田県文化財調査報告第103集—遺跡詳細分布調査報告』

に速報しているが、その後、遺物の整理作業等が進展したので改めてその概要を報告した次第である。

II 遺跡の位置・立地・現状

遺跡は平鹿郡平鹿町上吉田間内字中山に所在している。奥羽本線横手駅から直線距離で西に3.5kmである。秋田方面より国道13号線を北上し、横手市婦気で折れて県道横手一沼館線を西方向に2.5km程行くと丘陵地に入る。その丘陵地をのぼりきった西の端が中山地区である。

遺跡の所在する中山丘陵地は、小さな起伏にとんだ地形をしているが、中山窯跡は丘陵地西縁の南北に長



第1図 遺跡位置図(●印) 国土地理院発行5万分の1地形図「横手」を使用

*秋田県立博物館

い独立丘の東西に面した斜面部にある。独立丘頂部の標高は72.5m、西に広がる水田面の標高は約55mである。

中山丘陵地一帯は広大な樹園地であり、窯跡周辺もブドウ園・リンゴ園として利用されている。

Ⅲ 調査概要

中山窯跡は独立丘の東・西両斜面部にまたがっており、約7,000m²の範囲と考えられる。

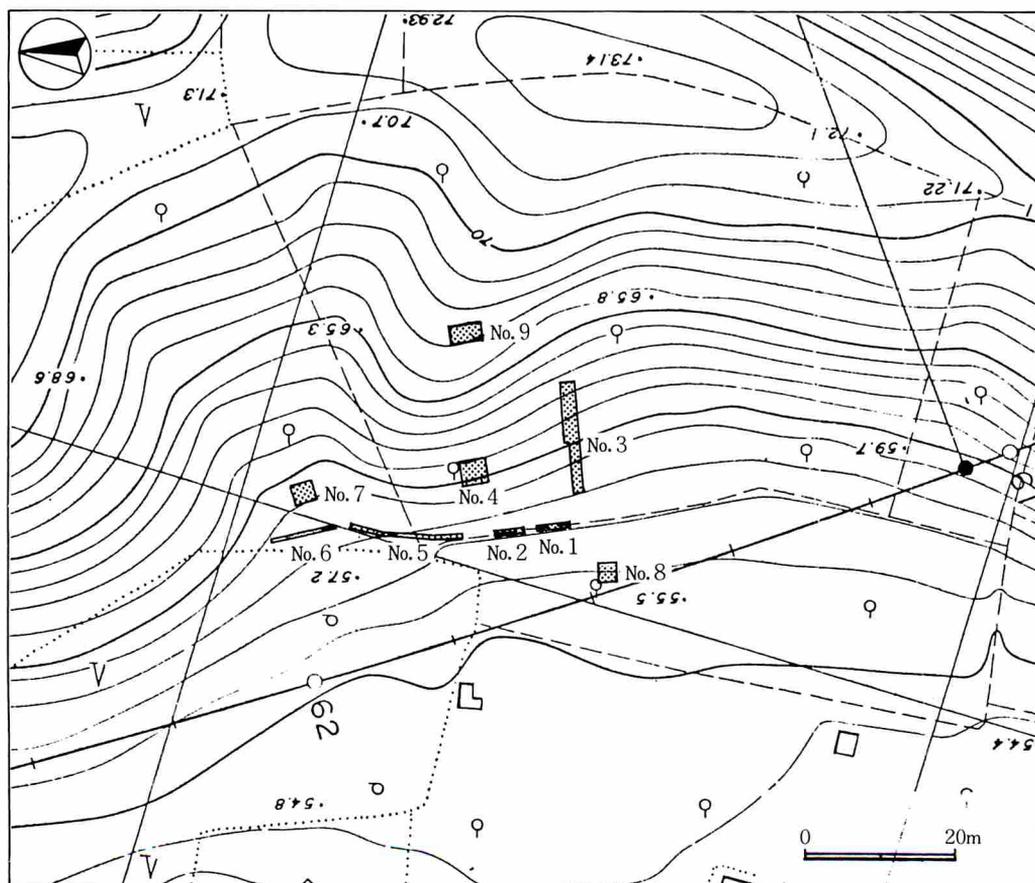
最も遺物が散乱していた西斜面北側の松井敬吉氏所有のブドウ園・リンゴ園周辺に9ヶ所の試掘坑を入れてみた。いずれからも須恵器片が見つかっており、量的にはNo.1・2・3試掘坑内からの出土が多く、とくにNo.3では多量の須恵器とともに窯壁片・焼石が検出されている。

ここではNo.3試掘坑の調査状況を中心に説明して行

きたい。

No.3試掘坑周辺では地表面に須恵器破片が散乱している状況がみられ、ブドウ棚の支柱をくぐるように山裾部から中腹部にかけて幅2m・長さ15mの長いトレンチを入れてみた。山裾部では表土下30cmで地山の褐色土層に達し、遺物の出土量は比較的少なかった。中段より上では表土下20cmで明黄褐色土層に達した。明黄褐色土層上面には焼石および窯壁片・須恵器等が散乱しており、北側に直径1.2m程の火床面がみられた。上段では表土下40cmの明黄褐色土層上面に大量の須恵器・炭・焼土・スサが混在している状況がみられた。

中段での層位段面は、表土の黒褐色土層の下が明黄褐色土層、さらにその下が軟質の黒褐色土層、その下に地山の礫を含む褐色土層となっている。遺物は明黄褐色土層上面にみられるが、それより下の黒褐色土層と地山にはみられなかった。



第2図 試掘坑位置図

No.3の試掘坑全体を掘り下げた段階で、平坦であった地表面に対して、明黄褐色土層と地山は南側に落ち込んでいき、明黄褐色土層上面に遺存していた火床面も北西に向きをもっているようであった。

このことからNo.3試掘坑においては、明黄褐色土層上面に構築された北西に向きをもつ窯跡部分が、開墾により削平された可能性が強いと考えられる。

なお西斜面の地山の状況については、丘頂部付近と山裾部でちがいがみえており、丘の頂上に近いNo.9試掘坑では表土下15cmで砂利混りの明黄褐色土層であり、山裾部のNo.1・No.2試掘坑およびその下平坦部のNo.8試掘坑では表土下40～20cmで、粘土質の褐色土層であった。

Ⅳ 出土遺物

No.3試掘坑では多量の窯壁片・焼石とともに、表土下から多量の須恵器が検出された。出土した須恵器の器形は、杯・蓋・壺・甕・小壺・硯などである。これより出土した須恵器について、形態の特徴に製作技法を加味させて説明していきたい。なお須恵器甕についてはNo.4試掘坑で口頸部の遺存状態の良いものがあったので、図示し説明を加えた。

杯 高台の付くものをA類、高台のないものをB類として分類している。

A₁：(第5図13)

青灰色を呈し、比較的薄いつくりである。口径13.0cm・高さ4.5cm・台径9.5cm、高台の高さは8mmである。底部は平坦で体部から口縁部にかけて直線的に外傾している。高台は杯底部周縁に近い内側に付けられており、外側につよくはり出ている。器内外はロクロ調整されている。底部は回転ヘラ切りで切り離しが行われ、高台の周縁は後にナデ調整されている。

A₂：(第5図14～17)

灰黒色を呈し、比較的厚いつくりである。口径13.0cm・高さ4.5cm・高台径8.5cm内外で、高台の高さは6mm程である。17をのぞいて底部は平坦であるが、体部との境界は不明瞭である。体部は底部より丸味をもっており、口縁部でわずかに外反している。高台はわり合い厚く、わずかに外側にはり出しており、接地面が平坦なものと同みが入ったものがある。器内外はロ

クロで調整されている。底部は回転ヘラ切りで切り離しが行われ、高台周縁は後にナデ調整されている。

A₃：(第5図18)

上記のものより大形のもので、灰黒色をしている。推定口径16.6cmである。底部は平坦で体部から口縁部にかけて直線的に外傾している。高台は底部周縁より6mm程内側につき、高台の幅は8mm程である。器内外はロクロ調整されているが、体部外側の中位に3条の沈線状の調整痕が残っている。なお底部の切り離しは不明であるが、高台周縁をナデ調整している。

B類は製作技法のちがいにより6分類した。

B₁：(第6図1)

灰色を呈し、焼けひずんでいる。推定口径14.6cm・高さ3.8cm・底径8.0cmである。底部はやや上げ底組みであり、体部との境界は不明瞭である。体部は底部より丸味をもつつながり、内湾ぎみに外傾して口縁部にいたる。器内外はロクロ調整されている。底部および底辺部は切り離し後にヘラナデ調整されている。

B₂：(第6図2)

橙色を呈している。口径14.4cm・高さ4.5cm・底径7.0cmである。底部は平坦で体部から口縁部にかけて直線的に外傾している。器内外はロクロ調整されている。底部が切り離された後に、底部および底辺部は回転ヘラケズリ調整されている。

B₃：(第6図3)

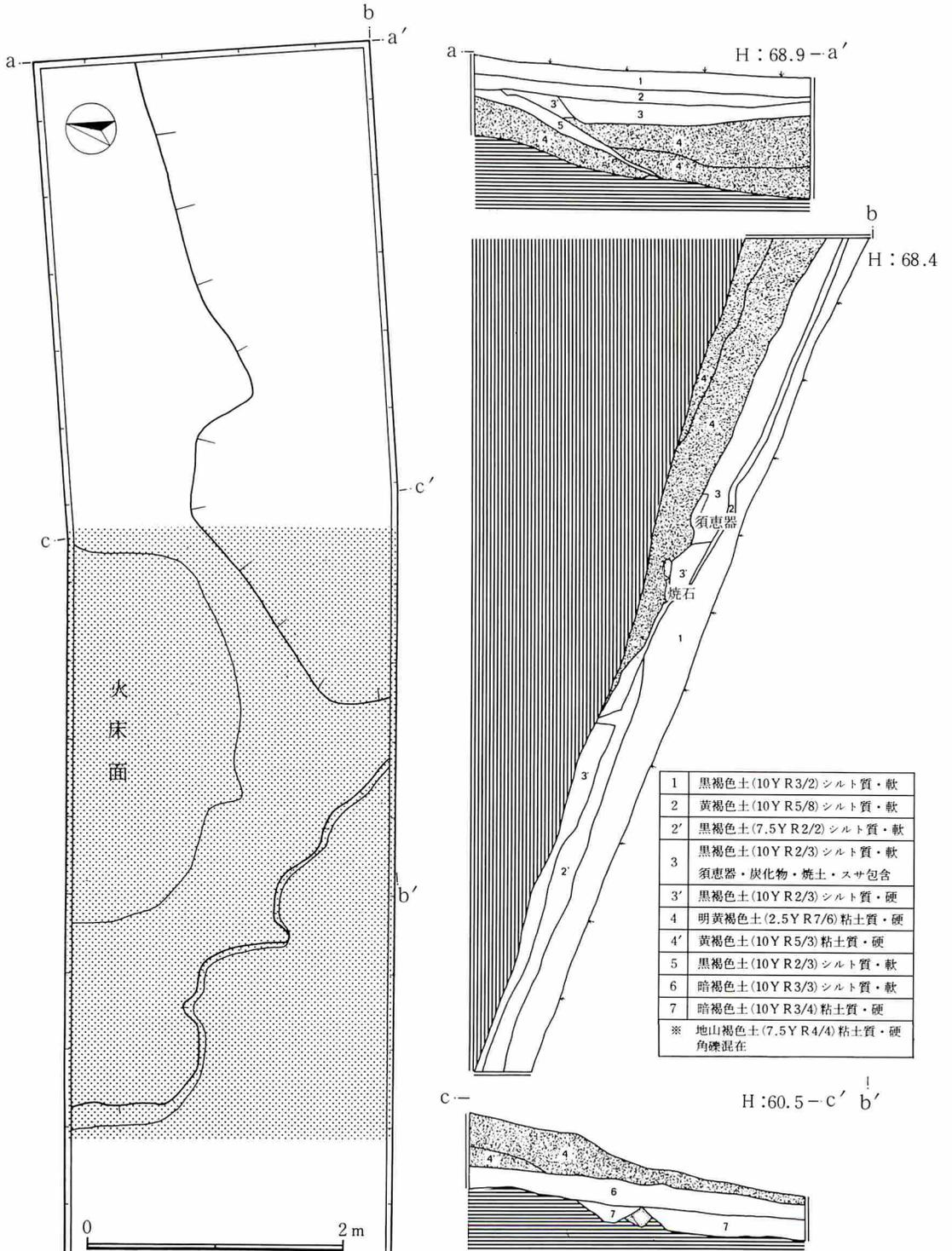
灰色を呈するが、部分的に黄橙色の部分を残している。小形で器壁は厚い。口径11.4cm・高さ3.5cm・底径7.0cmである。底部は厚く丸底組みで、体部との境界は不明瞭である。体部から口縁部にかけて内湾ぎみに外傾する。器内外はロクロで調整されている。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

B₄：(第6図4・5)

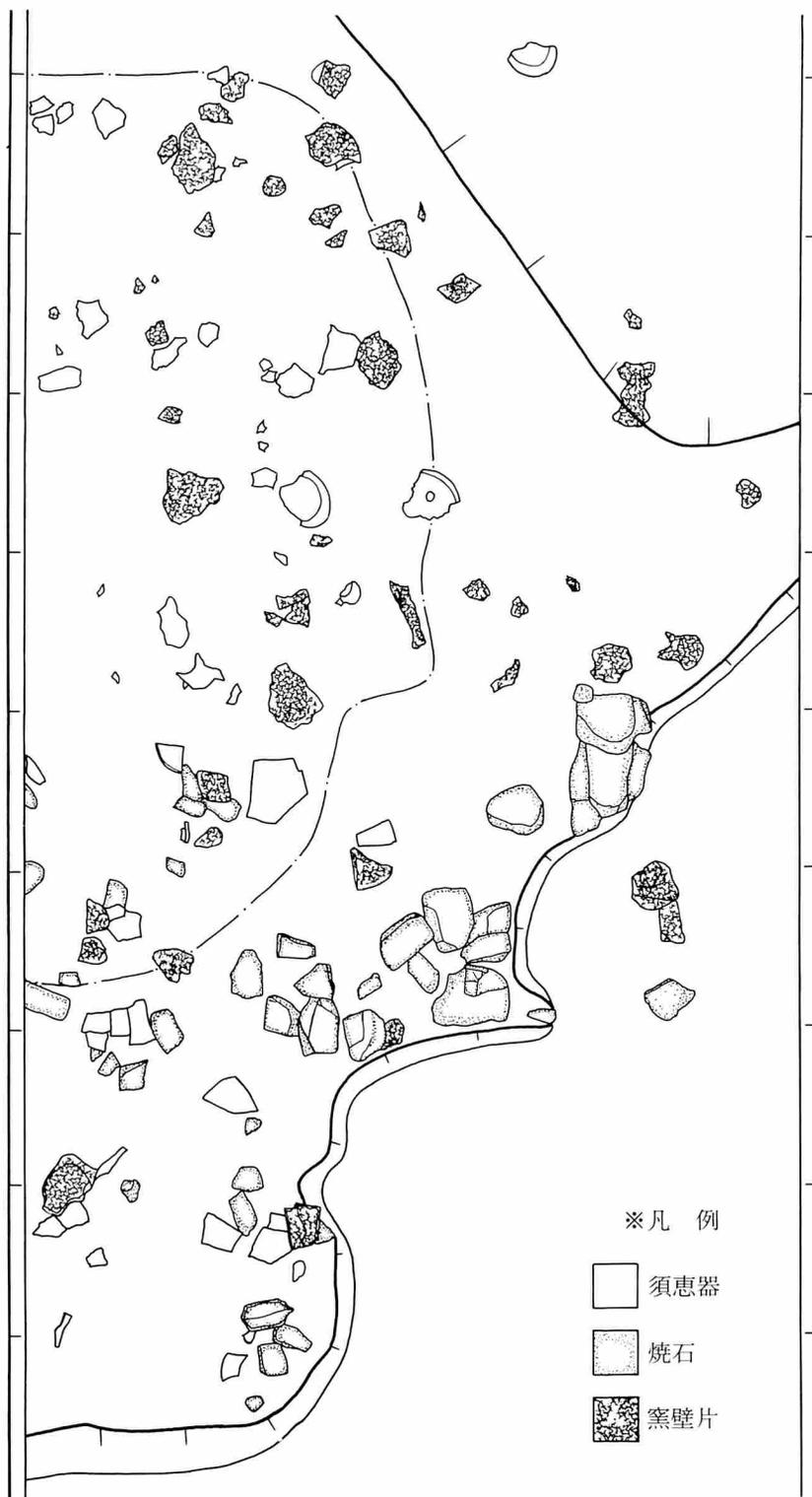
黄橙色を呈しており、比較的薄いつくりである。4が口径13.0cm・高さ3.8cm・底径9.0cmである。5が口径13.6cm・高さ3.8cm・底径9.6cmである。底部は厚く丸底組みであるが、底部と体部の境は判別できる。体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。器内外はロクロにより調整されているが、内底面が凹む。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

B₅：(第6図6)

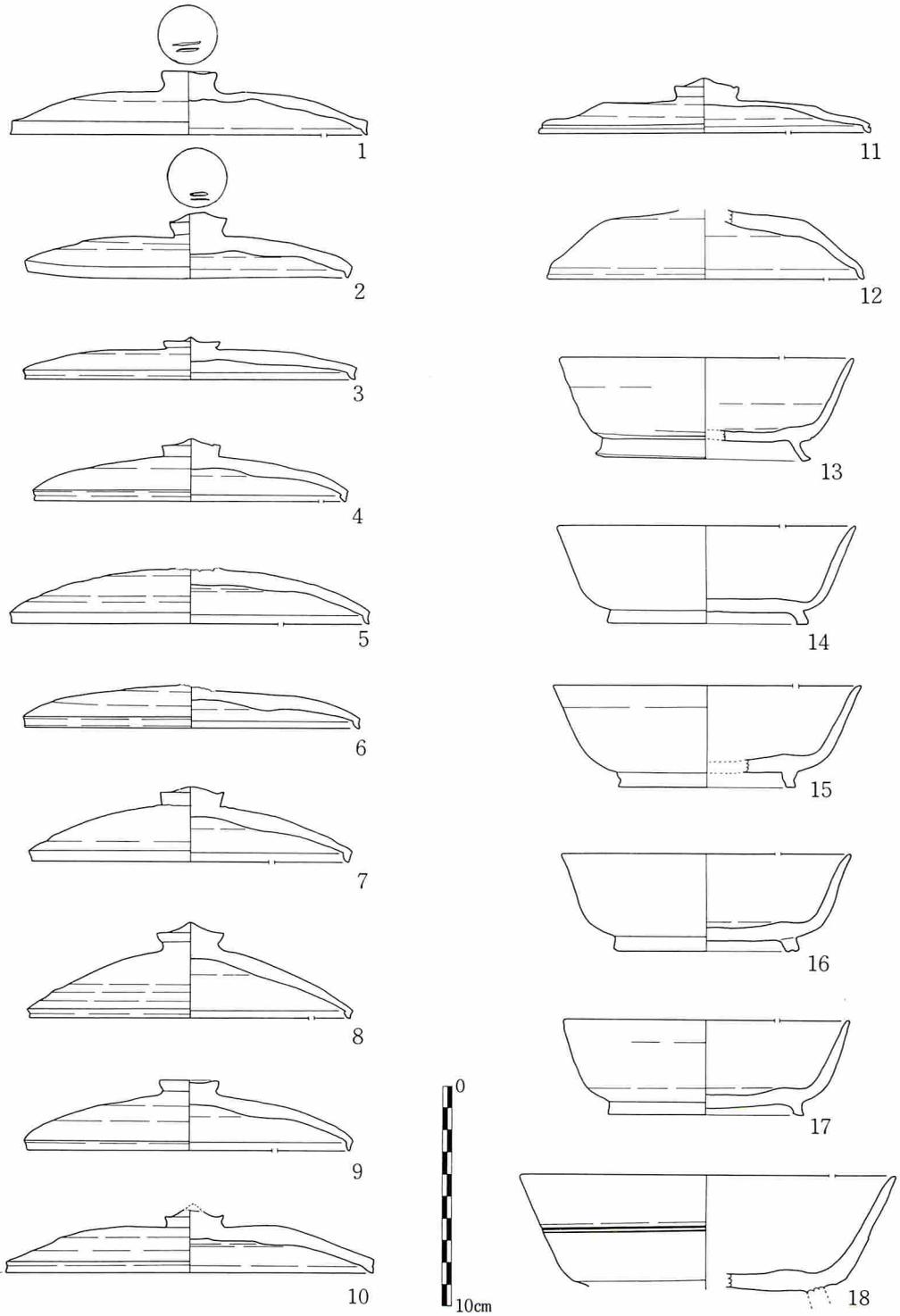
黄橙色を呈しており、比較的厚いつくりである。推



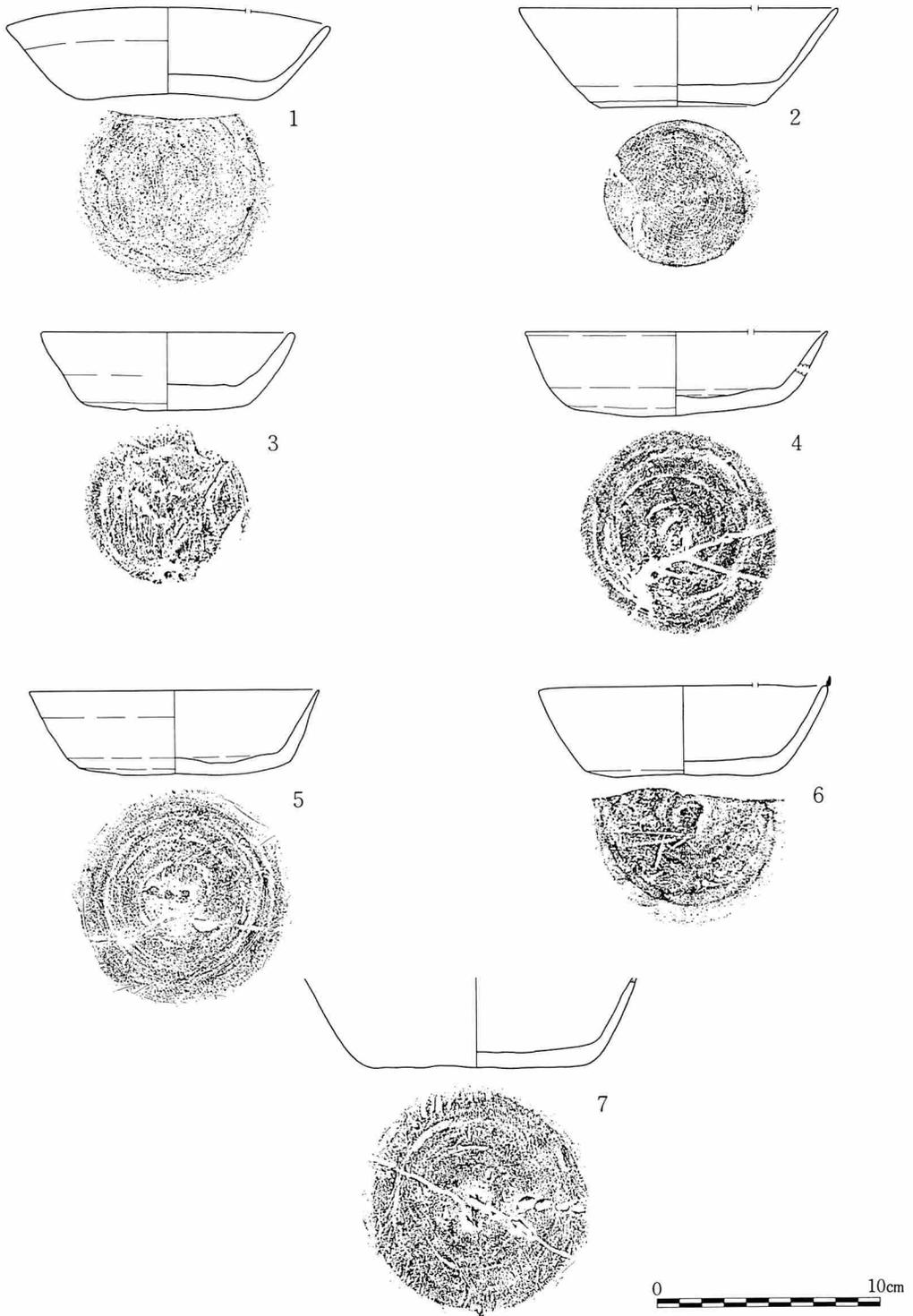
第3図 No.3 試堀坑平面図・土層図



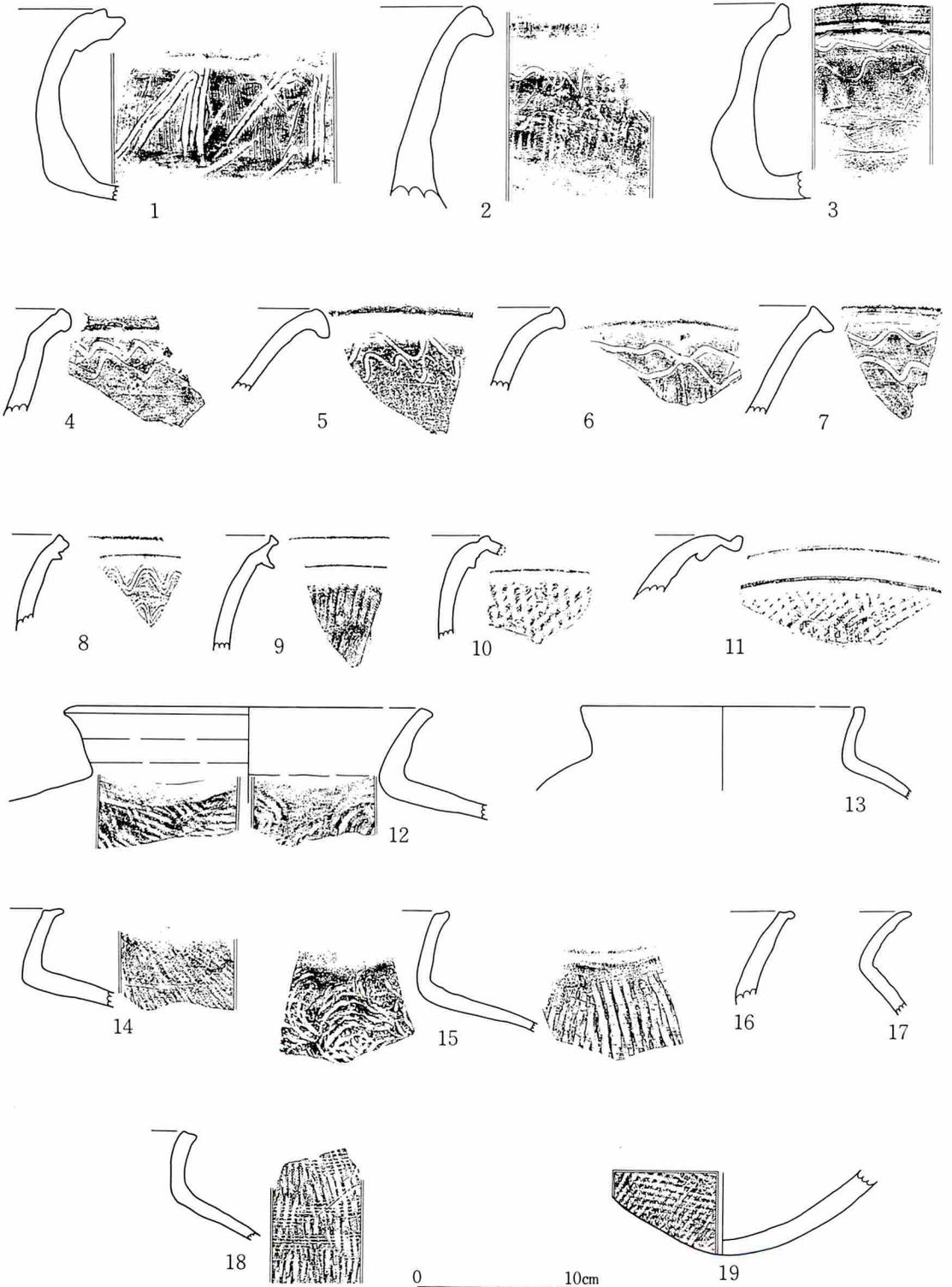
第4図 No.3 試掘坑遺物出土状況 (第3図点列内拡大)



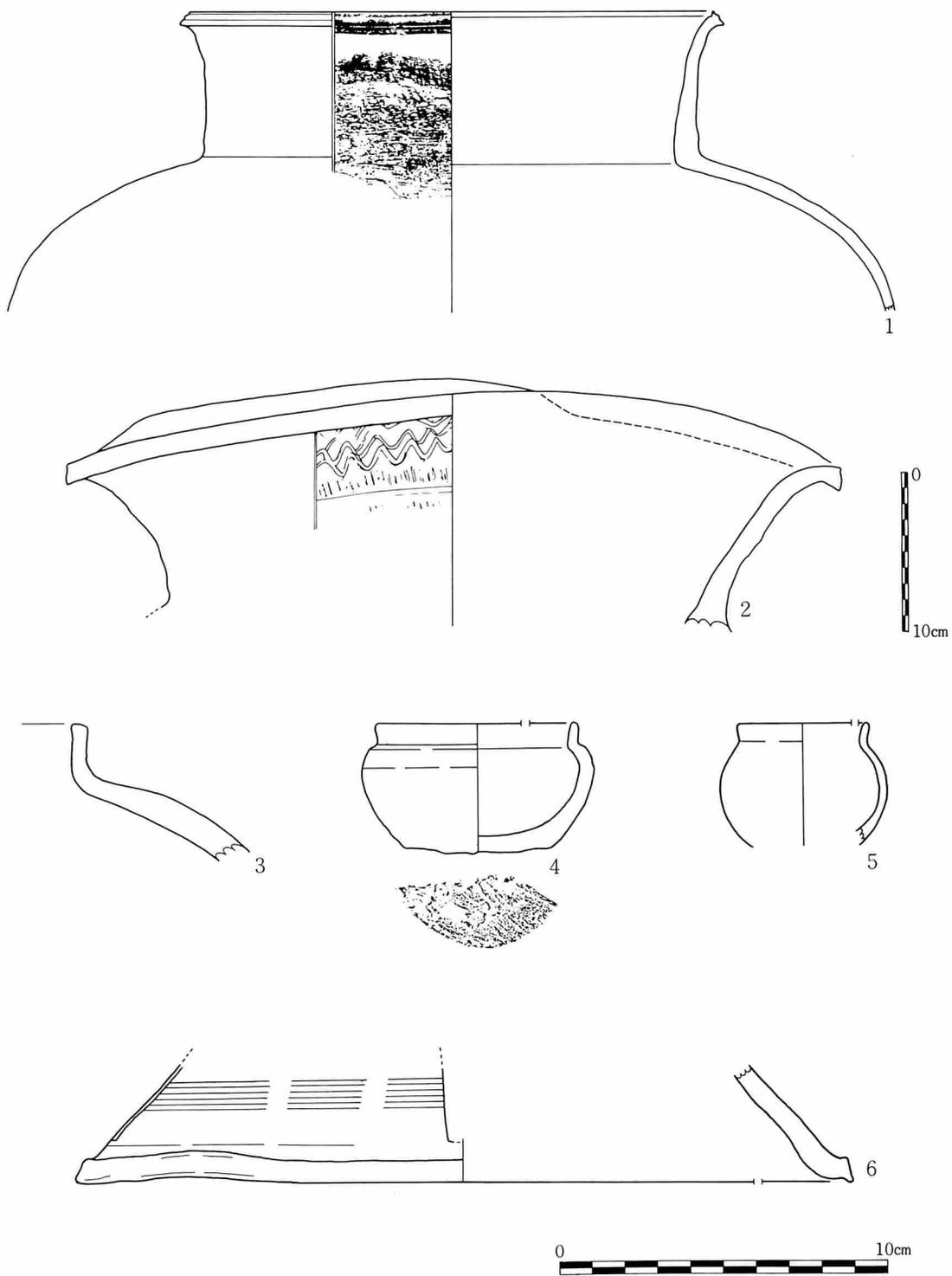
第5図 出土須恵器一蓋・高台杯一



第6図 出土須恵器一杯一



第7图 出土須恵器一甕一



第8図 出土須恵器一甕・短頸壺・小壺・円面硯一

定口径13.0cm・高さ4.0cm・推定底径8.4cmである。底部は平坦で、底辺部がやや丸味をもつ。体部から口縁部にかけて内湾ぎみに外傾する。器内外はロクロで調整されている。底部の切り離しは回転ヘラ切りで行われ、底辺部はナデ調整されている。

B₆：(第6図7)

灰色を呈し、比較的大形のものである。体部から口縁部にかけて欠損している。底径9.6cmである。底部は平坦で底辺部にやや丸味をもつ。器内外はロクロで調整されており、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。

蓋 比較的出土点数が多い。形態のちがいでA～Dに分類した。

A：(第5図1～9)

灰色ないし灰黒色を呈している。天井部がなだらかな丸味をもって口縁部にいたり、口縁部が内側下方に折れまがり、陵をなしている。口縁端部はとがっている。天井部中央にはツمامミが付けられている。器内はロクロ調整されているが、外側はツمامミ周辺から口縁部近くまで回転ヘラケズリ調整されている。

1～6は比較的器高が低いが、7～9は高さがある。ツمامミは擬宝珠状のものが多く、9のように偏平なものも含まれる。なお1・2のツمامミ上部に「二」に見える印が付されている。

各蓋の計測値は以下のとおりである。

1. 口径15.8cm・高さ2.8cm・ツمامミ直径2.4cm
2. 口径14.2cm・高さ3.0cm・ツمامミ直径2.5cm
3. 口径14.6cm・高さ1.9cm・ツمامミ直径2.5cm
4. 口径13.8cm・高さ2.8cm・ツمامミ直径2.6cm
5. 口径15.8cm・ツمامミなし・高さ2.5cm
6. 口径14.8cm・ツمامミなし・高さ2.0cm
7. 口径14.0cm・高さ3.4cm・ツمامミ直径2.8cm
8. 口径14.2cm・高さ4.3cm・ツمامミ直径2.9cm
9. 口径14.4cm・高さ3.2cm・ツمامミ直径2.6cm

7～9については、A₂に分類した高台付杯と口径寸法が近い。

A'：(第5図10)

黄橙色を呈し、最も大きなものである。口径16.4cm・高さ2.9cmである。形態・製作技法ともにAと似ているが、天井部よりゆるやかにおりて口縁部に三分の

二程近づいたところで鈍い角度で凹んでいる。天井部中央には直径2.6cmの擬宝珠状のツمامミが付いている。

B：(第5図11)

灰色を呈し、薄いつくりである。口径14.6cm・高さ2.4cmである。天井部は平坦で中位から鈍い角度をもって下り、口縁部にいたる。口縁端部は外側に丸く折り返されている。器内面はロクロ調整されており、天井部を平坦に、さらに鈍い角度をつけて回転ヘラケズリ調整している。天井部中央には直径2.8cmの擬宝珠状のツمامミが付いている。

C：(第5図12)

灰色を呈しており、ツمامミはなくなっている。推定口径14.0cm・現存する高さ3.1cmであり、小さくて高さがある。天井部のツمامミ周辺は平坦であるが、中位よりゆるやかにおりて、口縁部にいたる。口縁端部はわずかに内側に折られている。器内はロクロ調整されており、外面天井部ツمامミ周辺は回転ヘラケズリ調整されている。

甕 No.3 試掘坑では甕の胴部破片が多量に出土したが、口縁部から胴部にかけて接合できたのは、わずかに1点だけであった。ここでは口縁部破片の特徴的なものを抽出して分類した。

A：(第7図1～11)(第8図1・2)

大形の甕の破片と考えられ、製作技法上の特徴を上げると以下のとおりである。

- 口縁部がつよく弓なりに外反している。
- 口唇部が肥厚し、外側にはり出ている。
- 口唇部の下に隆帯をもつものがある。
- 口縁部外側に櫛描波状文を描いている。

第8図1は、赤褐色ないし黄灰色を呈している。口径39cm前後である。胴部上位がふくらみ、口縁部はほぼ真直に立上り、口唇部がとがっている。胴部外面には平行タタキ目痕が密にほどこされ、口縁部中位にも平行タタキ目の痕跡がみられる。

第8図2は、No.4 試掘坑北西隅の地山直上から出土した。周辺から胴部の大きな破片もみつかったが、接合できなかった。この甕の口縁部は灰黒色を呈し、かなり焼きひずんでいる。口径55cm前後で、現存する高さが12cm前後である。弓なりに外反し、口唇部がつよくはり出し陵をもつ。口縁部外側下半に平行タタキ目

の痕跡が残っており、内側とともにナデ調整されている。なお外にはり出した口唇部の下に3段の櫛描波状文が描かれている。

B：(第7図12～18)

Aと比較して小形のものと考えられる。製作技法上の特徴を上げると以下のとおりである。

- 口縁部の高さが3～6cmである。
- 口縁部が直線的に外傾する。
- 口唇部が平坦にならされているか、あるいはやや凹んでいる。外側にわずかなはり出しをもつ。
- 胴部外側には平行タタキ目痕が、内側には同心円状のアテ板痕が残るものがある。

短頸壺 第8図3は灰色を呈している。器内外はロクロ調整されている。

小壺 第8図4は灰黒色を呈している。推定口径6.3cm、高さ4.0cm、推定底径4.4cmである。胴部上半で最大径7.2cmを測る。頸部に段をもち、口縁部が短く立ち上がる。器内外はロクロで調整され、底部はヘラケズリ調整されている。

第8図5は灰色を呈している。推定口径4.0cmである。球形の体部に短く外反する口縁部がつく。器内外はロクロ調整されている。

円面硯 第8図6は円面硯の脚部であり、灰色を呈している。脚裾部の直径が24cmと推定される。裾部に陵をもっており、2cm程上の部分に長方形あるいは台形のすかしが切られていたようである。すかしの位置は対応する4面と思われる。内外ともにロクロ調整されている。

V 考 察

ここでは出土した須恵器についてまとめ、若干の考察としたい。

No.3 試掘坑から出土した須恵器は、同一器種であっても形・大きさ・製作技法において様々なものがみられる。その中から特徴的なことをあげると以下のとおりである。

- 杯は底部を回転ヘラ切りで切り離されている。
- 杯B₁・B₂類のように切り離し後にヘラナデ、ヘラケズリ調整されたものがある。

○高台付杯では形態・大きさ・製作技法からA₂類が一群となっている。

○杯B類ではB₃・B₄類にみられるように、底部が厚く丸底ぎみのものがみられる。

○蓋の出土点数が多い。口縁部を短く下に屈曲させており、天井部を回転ヘラケズリ調整している。

○口唇部をはり出させ、外側に櫛描波状文をほどこした大形の甕の破片が多くみられる。

秋田県内では現在まで9ヶ所の窯跡が調査されており、出土須恵器について中山窯跡のものと各地の窯跡のものを比較検討した。最も一般的で出土量の多い杯がその対象である。

底部の切り離し手法が回転ヘラ切りで行われている杯を主に出す窯跡は、秋田市手形山1号窯跡、横手市郷土館窯跡、大曲市成沢1・2・3号窯跡、葛法1号窯跡がある。このうち手形山1号窯跡、郷土館窯跡の杯は回転ヘラ切りで切り離された平底を呈するものに回転糸切りで切り離されたものが含まれており、また成沢1・2号窯跡でも回転ヘラ切りで切り離された杯に回転糸切りで切り離された内黒の土器器高台杯が伴って出土しており、底部の切り離し手法が回転ヘラ切りから回転糸切り手法へ移行する直前の様相がみられる。葛法1号窯跡・成沢3号窯跡出土の杯は、回転ヘラ切りで切り離された平底を呈するものであるが、体部と底部との境界は明瞭なものが多い。

中山窯跡の杯には切り離し後の底部にヘラケズリ調整あるいはヘラナデ調整をほどこしたものがみられることと、底部が厚く丸底ぎみのものがあることなどから上記の窯跡より古いものと考えられ、回転糸切り手法の導入を9C前半頃²⁾と推定すると、およそ8C後半を中心とした年代が考えられる。

なお手形山窯跡など他の窯跡が半地下式の構造で、杯の出土割合が高いのに対して、中山窯跡では大形の甕の出土割合が高い。窯構造についても検討する必要があるだろう。

最後に、中山丘陵地の分布調査および当遺跡の発掘調査について平鹿町史編纂専門員の山田貞吉氏より全面的な協力をいただいた。明記して感謝の意をささげたい。

註

- 1) 秋田県教育委員会 (1982): 「遺跡分布調査報告書」
『秋田県文化財調査報告書第93集』
遺跡名が竹原となっているが、山裾より上が中山という字名であるので中山窯跡とした。
- 2) 弘田柵調査事務所 (1975): 『弘田柵跡—昭和50年度発掘調査概報—』
※SK60土壇内から嘉祥二年(849)の年紀をもつ木簡にともなって、糸切り底で体部にヘラケズリ調整のある明褐色を呈する杯、ロクロ仕上げによる明褐色を呈する甕、ヘラ切り・糸切り底の須恵器杯が出土している。

参考文献

- 武藤鉄城 (1949): 「秋田県仙北郡九十九沢窯跡」 『日本考古学年報 2』
大和久震平 (1963): 「平鹿郡雄物川町末館窯址発掘調査報

- 告」 『横手郷土史編纂委員会遺跡発掘調査報告第三輯』
秋田県教育委員会 (1967): 「足田遺跡発掘調査概報」 『秋田県文化財調査報告第10集』
秋田考古学協会 (1974): 『手形山窯跡』
秋田県教育委員会 (1975): 「海老沢窯跡緊急発掘調査報告書」 『秋田県文化財調査報告書第32集』
秋田県教育委員会 (1976): 「成沢遺跡発掘調査報告書」 『秋田県文化財調査報告書第36集』
横手市教育委員会 (1976): 『郷土館窯跡』
本荘市教育委員会 (1978): 『葛法窯跡分布調査報告書』
杉洞馨 (1975): 『物見窯址群第一号窯址発掘調査略報』
秋田県教育委員会 (1983): 「遺跡詳細分布調査報告書」 『秋田県文化財調査報告書第103集』
平鹿町史編纂委員会 (1984): 「中山丘陵西麓の窯跡群」 『平鹿町史』

平鹿郡平鹿町中山窯跡発掘調査概報



△遺跡遠景（西→東）



△遺跡近景（西→東）



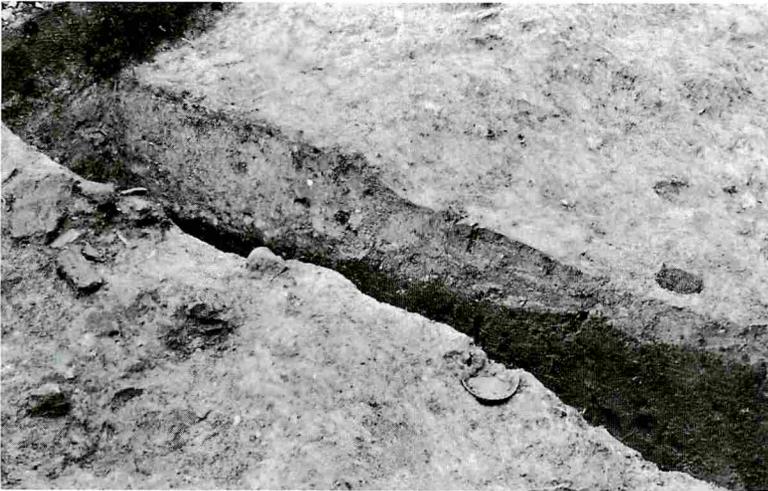
△No. 3 試掘坑調査前（西→東）



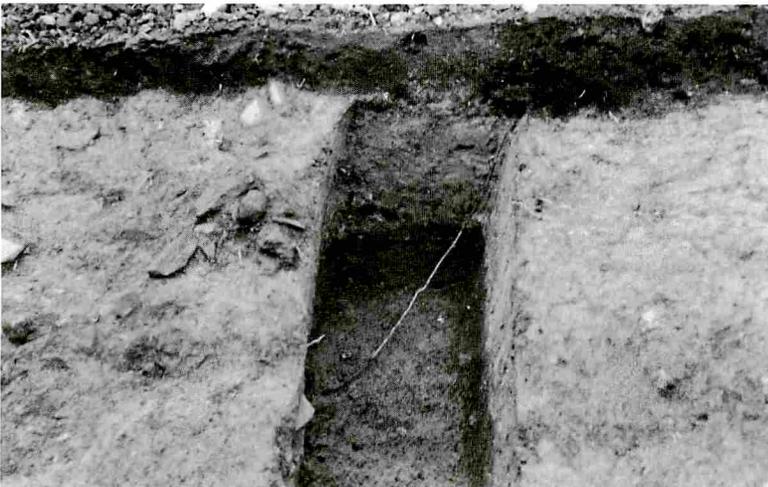
△No. 3 試掘坑調査後（西→東）



◁No. 3 試掘坑上部土層
(西→東)



◁No. 3 試掘坑中部土層断面
(西→東)



◁No. 3 試掘坑中部土層断面
(南→北)

